

ボランティアやNPOなどの市民活動が、環境、福祉、教育などさまざまな領域で、また、これらの領域を超えて、横断的に活動しています。いずれも、人々の生活に密着した課題の解決を目指し、豊かで活力のある生活を築く上で重要な役割を果たしつつあります。市民活動は、自立した市民による主体的な活動であり、柔軟性やきめの細かさ、先駆性があります。今回は、子育てと障害者、高齢者に関する活動を取り上げました。

🕒 「ゆきわりそう」とは

「ゆきわりそう」は、昭和62年に障害を持つ人やお年寄りが、地域のなかで安心して暮らしていくために必要なシステムを創ることを目指してオープンしました。

現在、「ゆきわりそう」の利用者は約700人で、常時利用している方は約350人です。利用者を支えるスタッフ等は約120人（スタッフ約30人、ホームヘルパー約70人、各プログラムの専門家約20人）です。デイサービス、ショートステイ、通所授産施設の運営、障害者発達プログラムの展開、介護保険事業などさまざまな事業を行っています。「ゆきわりそう」では、「障害者」、「高齢者」などといった枠を外して、共に生きる生活者として、一つのコミュニティを形成しています。

特徴ある活動としては、重い障害を持つ人やボランティア、介助者、その家族から構成される合唱団があります。平成12年5月には、ニューヨークのカーネギーホールでベートーヴェンの第九を歌いました。

🕒 「ゆきわりそう」を続けて

「ゆきわりそう」の理事長の姥山寛代さんは、「ゆきわりそう」を始める前、ケースワーカーでした。そのころ、障害児・者の親の不定愁訴などを聞き、親の負担を軽減する必要性、社会的弱者のおかれている環境の貧弱さを感じたことが、「ゆきわりそう」を始めるきっかけとなりました。当初は、月に1日くらいしか家に帰れないことも。利用者の事故、近隣からの苦情などもさまざま



アットホームな雰囲気ของกลุ่มホームの食堂

地域福祉研究会 ゆきわりそう



ピアノのリズムに合わせて(デイサービスの様子から)

まあったそうです。しかし、姥山さんは、「例えば、障害者がベートーヴェンの第九を歌うなどといった『当たり前のこと』が、『当たり前でないこと』と考えられることがあります。そのようなことに対して、自分の感性に耳を傾け、理念や使命感を持ち続けて、非営利でここまでやってこられたことや、「ゆきわりそう」に関わった多くの人々が安心して生活している様子を見たとき、続けてきて良かった。」と言います。

🕒 ボランティアをする

ボランティアを行うには、「こうあるべき」といった「心の枠」を取り払うことが必要だと姥山さんは言います。

ボランティアやスタッフで来る方は、最初は、緊張してからはがちがちで、顔はこわばっているそうです。しかし、経験を積んできて、障害者や高齢者などの方が示すサインを見つけられるようになると、それが喜びとなり、糧となってきます。そのようになってくると、今度は、介護をされている人からは頼りにされるようになり、大きな生きがいとなっていきます。